

テント一週一文（ふ）—— 紹介：「天恵の海」186号

（承前）

1月末のある日、久しぶりに朝のテント設営に参加しました。風の冷たい日でした。私は時々しか参加しないので設営の要領が分かりません。テントは先ず上部の支柱に収納されている下部の支柱を上部支柱から引き出して、そこに開いている穴に上部支柱の最下部に付いているボッチをカチッと入れて上部支柱の最下部と下部の支柱を固定します。それでたたんだ時は1メートルちょっとでも、収納している下部支柱で伸ばせるので2メートル近くまで高くできるのです。「2メートル近くまで」とあいまいな言い方をしますのは、下部支柱の穴は4個か5個開いていて、上部再開のボッチを低い所の穴にカチッと入れるとテントは低く固定できるし、高い所についている穴にカチッと入れれば高く固定できるのです。

他の人が立てているのを見ますと「簡単にできる」と思って、私もしてみることにしました。手間取ります。下部支柱の穴と上部支柱のボッチがうまくかみ合ってくれません。上部支柱を左手で抱えながら伸ばした下部支柱の穴を探すにはバランスをとらなければならないのですが、慣れないのでバランスが取れなくて、ふらふらしてしまうのです。私がしていると、見かねたのでしょうか、若い、といっても40歳くらいでしょうか、男の人が「私がしましょう」と引き取ってくれて、スルスルと立ててしまいました。

二張り目は私よりも少し若い、といっても60歳くらいでしょうか、女の人が男性3名と要領よく立てました。「うまい、うまい」と拍手をしたら、「テント皆伝」と右手の親指を立てて応えてくれます。

「テント皆伝？」と聞き返すと、「あれ、ご存じなかった？ テントの立て方には段級試験があるのよ。国家試験。私は受けてはいないのだけど、大体立て方のコツは分かって来たからきっと免許皆伝よ」と真面目に教えてくれます。免許皆伝に掛けて「テント皆伝」と自賛していることがやっと分かりました。

テントが立ち上がると、私はテント内部の飾り付けをしました。私はテント初級なので、韓国からの激励幕や日めくりカレンダーを手にしては「これはどこに掛けるのですか」と聞きながらテントの内装を手伝いました。私が内装でうろうろしている間に、他の人はテントの支柱に「原発いらない」と大書している黄色い旗を結びつけ終り、周囲には風よけ用に透明のビニールのカバーを張っています。ビニールカバーの幅は一定で2メートル弱なのでテントの下端から下げて地面に届くのですが、長さはまちまちなので、テント皆伝も「あれ？ これはここから始めていいのかな？」と迷っています。40歳は「あっ、それはここから」と自分の立っているコーナーから、テント皆伝の方へ手を伸ばしてカバーの端を受け取り、カバーの幅を整えて、テントの支柱に回して行きます。この40歳はテント5段かもしれません。

テントの周囲にビニールカバーを巻き終わると脱原発のモットーを書いた横断幕を下げたり、集会のポスターを下げたりして、テント設営はほぼ終了です。私を入れて5名で約30分かかりました。

テントのホームページ (<https://chibigonta.wordpress.com/about/>) にテントの写真が掲載されているのですが、これは周囲に透明のビニールカバーを巻いていません。夏の様子です。

設営が終ると、みんなが「寒い、寒い」と言いながらテントの中に入って来ます。新しい人がいると自己紹介をするのですが、私は、時々ではありますが来ていたので、自己紹介はしませんでした。とは言っても新人に近く、テント皆伝の女性も5段の男性も名前は知りません。今一人の男性も顔は見たことがあるナ〜くらいです。

テント内にみんなが来ると、世話人代表の村長さんが近頃の脱原発に関連するニュースなどを簡単に紹介します。私を除く4名は原発について詳しいようで、一家言あり、紹介されたニュースについての解説をしたり、関連する事柄を述べたりします。それが一段落しますと、次の話題に移ったり、「そろそろ失礼しま〜す」と帰りかけたりする人もいます。

この日は、村長さんの紹介ニュースが終ると、5段の男性が「こういうのをご存知ですか?」とタブレットの画面をみんなに見せてくれました。

テント皆伝の女性が「『天恵の海』? 知っているわよ」と応えて、「発行している会の名前は知らない、って言うか、忘れたけれど、ずいぶん前に『一週一文』で紹介していたでしょう。良い名前だな〜って思って、覚えていたの」と続けます。

(参考) テント一週一文(と) http://npg.boj.jp/kiyuku/week_repo/170703kuriyama.pdf

「良いのは名前だけじゃありません。ご存じないでしょうけど、内容もお勧め。ほら、見て。これ」と、彼女によく見えるように大きくします。

テント皆伝は、黙っていません。「私は名前から入るタイプなのよ。内容のことはね……、先回の紹介記事の内容は忘れたわ」と声が小さくなります。

テント皆伝と5段とは冗談を言える間柄のようです。

5段は、村長さんの方にタブレットを向けて「私は、ほら、ここの編集後記に感心しましたよ。この会報では編集後記と言わずに、『水めがね』と言っていますがね。なぜ感心したかという、不正や隠蔽や偽造は明らかになったときには話題になりますが、世の中は直ぐ忘れてしまいますよね。そして次の隠蔽などが明らかになったら、そのテーマのみを話題にする場合が多いですよ。この通信を出している方は、いろいろな偽装や偽造や捏造や隠蔽を関連付けて見ているのですよ。一種の通奏低音ですね。その通音を聞き逃してはいけない、と指摘しているのです」と、少し語調を変えて説明します。

村長さんも、通信のこの号は初めて見るようです。だから5段としては独壇場的雰囲気、説明にも力が入ります。今度はテント皆伝のほうを向いて、「長いこと処理場のテーマをフォローしていないと、この『水めがね』のような文章は書けません。だから、皆さんに勧めているのですよ」と、説明します。

「編集後記のどこが優れているかは判ったわ。でも通信の内容のことはどうして勧めないの?」と、皆伝は意地悪そうに尋ねます。

「いや、そう尋ねられるのを待っていたのですよ」

「私が畏にかかったっていう訳?」

「いえいえ、畏なんて言っていないですよ。よくぞ聞いて下さいましたって言うだけの」

「ふ〜ん」

「いま何時? えっ、もうこんな時間? 行かなければ……。一人でずいぶん長く喋ってしまって、すみません」と、誰に向かってか分かりませんが、詫びながら急いでバッグに手を伸ばします。

「説明しなくて行くの?」と追いつがる皆伝に、5段の頭は仕事モードに切り替わったのでしょ、
「会報をここに貼り付けておきますから、読んでみてください。この会報の内容で私の感心したところは、端的に言いますと、スウジ。数字です」と、バッグをかかえて姿を消します。

あわただしい二人の会話は終わり、しばらくの沈黙が訪れたテントでした。

(文責 栗山次郎)

2018年2月19日公開

「三陸の海を放射能から守る岩手の会」発行 「天恵の海」186号(2018年2月4日)
[Http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/tenkei186.pdf](http://npg.boo.jp/kieyuku/week_repo/tenkei186.pdf)